ペドロ・コスタ　インナーヴィジョンズ
手話による展覧会解説動画原稿

はじめに
ペドロ・コスタは、現代のポルトガル映画を代表する映画監督です。その活動は 1980 年代末から現在に至るまで国際的に高い評価を受けてきました。映画だけでなく展覧会を通して美術分野でも紹介されてきましたが、日本での本格的な個展は今回が初めてです。
今回の展示では、ポルトガルで暮らすアフリカ系移民を映し出した作品など、コスタの作品において重要な役割を担う登場人物たちや、彼ら彼女らが生きる場所に関わる映像作品を紹介します。また、東京都写真美術館のコレクションも紹介します。コスタの映像表現を通して、歴史的・社会的文脈に触れることで、「インナーヴィジョンズ」という主題を考察します。

インナーヴィジョンズ
本展は、スティーヴィー・ワンダーが 1973 年に発表したアルバム『インナーヴィジョンズ』と同名のタイトルを掲げています。コスタは 15 歳でこのアルバムに出会い深い影響を受けました。階級や人種にまつわる問題と希望を描いたこのアルバムに、激動の時代と自身の内面の変化が重なり、共鳴したといいます。本展は「内面のヴィジョン（inner visions）であり、内面から現れるヴィジョンとも解釈できる」という二重の意味を込めることで、コスタの映像世界に宿る多様な物語の可能性を示そうとしています。

ペドロ・コスタ映画の特徴
コスタの撮影手法は、被写体と長時間にわたって濃密に寄り添うこと確立しています。
また画面に映る人々との対等に協働する点が、コスタ作品を唯一無二のものとしています。
内容としては、アフリカのカーボ・ヴェルデの移民やポルトガルのリスボンの貧民街に暮らす人々、例えばヴェントゥーラを映し出すことで、植民地主義や貧困といった社会の暗部が浮かび上がります。彼は現実を操作せず、目の前にあるものをただ記録します。
そしてこのドキュメンタリーとフィクションのあいだを行き来することが、コスタ作品の重要なテーマといえます。彼の眼差しは、カメラを掲げたまま相手の沈黙に寄り添います。

映画と美術の間
コスタは、映画制作をしています。また、自らの映像作品を美術館の空間で見せることもしています。
彼は、「映像そのものは同じでも、映画と美術館の展示ではそのつながり方が違う」と語

ります。展覧会のために、映像作品を制作するのではなく、映画を美術館の空間に持ち込むことで、見る人の問題意識を広げ、新たな体験を生み出そうとしてきました。
本展では映画のなかの映像がバラバラの断片として空間に展示されます。
来場者は映像・写真・音が交錯する展示空間を歩きながら、その断片を自身でみつけるような体験をします。本展覧会では通常の映画とは異なる鑑賞体験をお楽しみいただけます。

映画は千の手紙

コスタの映画制作の方法論は、被写体との協働を通じて現実の時間へと深く接続しています。これにより、作品は単なる映像作品を超え、共同体的な経験としての映画体験となるのです。
「映画それぞれは千の手によって書かれた手紙である」という彼の言葉があります。
映画は、ひとりの作家による自己完結的な表現にとどまるものではなく、監督、スタッフ、観客すべての人々の生が交錯することで成り立っています。また同時にそれ自体が共同体の記憶として、受け継がれていきます。
つまり映画は「手紙」となって他者の声や人生を受け取り、次の時代や次の誰かへと手渡されていくメディアであるとも言えるのです。